

「株式会社 姫路シティ FM21」

第 40 回 放送番組審議機関 審議会議事録

1. 開催日時 平成22年6月19日(土曜日) 午後1時30分～午後3時
2. 開催場所 姫路市本町68イーグレひめじ地下2階 ミーティングルーム
3. 出席状況

- 1) 委員総数 11名
- 2) 出席委員数 6名
- 3) 出席委員の氏名(敬称略、順不同)
梅宮 功 井上 重義 岩成 孝 大谷 昭仁
福井 舞 柳谷 郁子
- 4) 欠席委員の氏名(敬称略、順不同)
有馬 妙子 金山 光鎬 岸田 直美 衣笠 愛之
宮本 節子
- 5) 会社側出席者氏名
白井 正敏 (専務取締役 放送局長)
山南 俊雄 (常務取締役 営業部長)
小幡 博 (営業企画 課長 兼 放送総務 課長)
小林 寛幸 (放送総務部編成制作担当)

4. 議題

(1) 放送局長挨拶

- ・ 本年第1回の番組審議会である。6月14日に株主総会があり、平成21年度の事業報告を行なった。大きな取り組みとして、4月1日よりJR姫路駅構内観光なびポートからサテライト放送を開始した。9月には、APSを中心とした放送機器の機材更新を実施した。
- ・ 開局時より業務委託を行っていた間鍋氏との契約が年度末で終了した。募集したところ、多くの応募があり、男性1名と女性5名を採用し、新たな体制でスタートした。3ヶ月を経過し、軌道に乗ってきた。
- ・ 22年度は「サイマルラジオ」を4月1日から開始した。ネットからFMゲンキを聴くことができるものである。各地から反響を頂いている。最大の目的はエリア内の難聴地域の改善である。夢前・安富・家島などに対してもっとPRする必要があると考える。

- ・ 交通情報について、市内4ヶ所のガソリンスタンドからの情報を発信していたが、ジャティックと提携し、市内・播磨一円の情報を発信できるようになった。回数も大幅に増やした。車で通勤されている方などに、的確な情報を提供できるようになった。
- ・ 5年ごとに免許の更新があり、その準備にあたっている。
- ・ 岩成委員、柳谷委員に登壇いただく「黒田官兵衛シンポジウム」を7月1日に実施する。姫路市、観光コンベンションビューローの共催、後援も神戸新聞などから得ている。応募をかけたところ、インターネットやハガキで302名の応募があった。
- ・ 8月1日に配布するGENKIラジオ新聞に掲載するほか、8月1日午後7時よりラジオ放送を行なう予定である。

(2) 平成22年3月度からの事業報告

a. スケジュールについて

- ・ 4月より交通情報とサイマルラジオを開始した。
- ・ 加古川のコミュニティFM BAN-BANラジオと共同番組を開始した。月1回はイーグレひめじから公開生放送を行っている。

b. 電話アンケート調査について

- ・ 調査結果は配布資料の通り。

c. 兵庫県立大学への講師派遣について

- ・ 160人の学生にコミュニティFMやFMゲンキの紹介を行なった。
- ・ リポートの課題があり、FMゲンキのリスナー拡大の提案を受けた。局長、常務にも回覧しており、良いものは今後の経営にも取り入れて頂く。
- ・ 印象として、「ラジオを持っていない」という人数が8割ぐらい。パソコンはほぼ100%持っている。
- ・ 「ラジオを聴く」「聴かない」ではなく、「ラジオを知らない」というのが現実。なにかのきっかけ、聴く理由、自分の関心がラジオに向かない限りはラジオを忘れられてしまうという印象が強い。その様な現実の中で、このような機会があるのは大変ありがたいことである。
- ・ その中で、FMゲンキを知ってもらう努力が必要。若い世代は新しいものへの関心が高いようだ。4月～始まっているインターネット放送は大変関心を持ってもらえた。
- ・ 今後は、話題となっているツイッターなどとの連携や、動画配信のUstreamなどを通じて、音楽+ゲストの姿をパソコンで見れるというサービスなどを利用しながら、若年層へのフックを作って行きたい。

d. 株主還元企画について

- ・ これまでは交通安全宣言として行なっていたものを、姫路城大修理応援事業キャンペーンとしてリニューアルして実施する。

(3) 事業計画

①黒田官兵衛シンポジウムについて

- ・ 7月1日にシンポジウムを実施する。
- ・ 当日の様子はラジオ新聞に掲載するほか、8月1日午後7時から放送予定。
- ・ 事前告知として、「黒田官兵衛物語」を、4月～6月にかけて放送した。

5. 審議内容

事務局より資料説明・試聴のあと、質疑応答を実施した。

委員	電話調査をしているが、実際は車に乗った人はよく聴いている。家にいる人に調査をするから認知度が少ない結果になっているのではないか。また、ラジオを持っている人が少なくなっている。防災セットにラジオが入っているが、それを出して聴く人はあまりいないようだ。車に乗らない人にどう知らすのか？ということが難しい。この数字で悲観的に考える必要はない。年齢の方よりも出てくる。
事務局	今回も属性が散らばるように、平日と土日、午前中と夕方にかけて調査してみた。1,000件はオペレータが会議室で1件ごとにかけた。
会長	調査のやり方が難しい。
委員	今、電話がかかってくるのは営業ばかりであり警戒されやすい。
会長	無作為抽出で電話をかけるのは答えが偏るとい声もあるが、それでも意味があるという人もいる。同じ条件で10年なら10年継続すれば、傾向が分かってくるということである。1回やっただけでは何のことか分からない。あらゆる属性に調査をすることは不可能であると聴いたことがある。この結果1つだけで何かをやるというのは危険である。色々なデータをミックスして対策を導き出したらよいのではないか。
委員	私はもっと少ないと思っていた。せいぜい割ぐらいだと思っていた。私の周囲は知らないという人が多い。認知度向上には力を入れて良いと思う。もうひとつ。ラジオは今、非常に安い。審議委員を始めてから、家の中にラジオをあちこち置いた。ラジオを知らない若者が多いということだが、高齢者に対しては「ながら族」がどれだけ脳を活性化するか、若返りするかということキャンペーンにしてはどうか。聴きながら色々なことができる。子供たちも静かなところで勉強させない方が良さそうだ。リスナーに向かって、脳の活性化にラジオを聴きましょうというキャンペーンをやってもいいのではないか。
事務局	おとしぐらいにある大学の先生が書いた本で「ラジオは脳にきく」という本がベストセラーになっていた。何かをしながら何かをするという

訓練を日々するという事は良い事だそうなので、放送局もしっかりとした根拠を持ってやっていくというのがよいかも知れない。そして、ラジオは安い。1000円あればお釣りが来る。

- 会長 学生時代はラジオを聴いていた。深夜にはラジオしかない。ラジオが手放せない日々だった。今はどうか？
- 委員 私はラジオのある生活があたりまえで一部だったが、周囲の友達にはラジオを持っていない。どうやって聴くのか、聴き方も分からない。
- 会長 聴き方とは？
- 委員 周波数の意味が分からない。どうやって合わせたら良いかわからない。
- 会長 テレビみたいに変われば良いが、合わせるというのが分からないということか。
- 事務局 リポートの中にも、コンポにFM/AMとかいてあったので、押してぐるぐる回してみたというものがあった。リモコン世代なので、回す、あわすということがイメージできないのではないか。
- 会長 学生でもながら族という聴き方をしているのではないか。あれは音楽を聴いているのか？
- 委員 自分で選んだ音楽を聴いている。
- 常務 我々の世代は塾が無かった。ラジオで様々な講座があった。みんなラジオを聴いていた。
- 会長 あのメロディーが聴こえてくると、今でもよみがえってくる。今に対応するのは難しい。色々なメディアがあり、自分の好みを反映させて選ぶという時代になっている。よい方法が有ったら教えて欲しい。若い人にしかわからない。
- 委員 FMラジオという性質なのか、単発の放送がほとんどであり、連続ものが無いように思える。例えば、朗読や黒田官兵衛の物語など、連続の読み物をやってみるということはできないか。次を楽しみにして聴いてもらえるのではないか。
- 局長 今回はスタッフに22年度の事業計画への提案をもらった。先ほど試聴いただいた西田理恵さんの黒田官兵衛の企画などは提案をもらってやってもらった。他にも西田さんの番組では童話の朗読なども行なっている。他にも可能性を探っていきたい。欲を言えばスポンサーが付けば一番である。定着しているのが「10才!2分のおとな団」である。土曜の昼前にやっているが、市内の小学4年生が作文などを発表している。これらも連続性のある番組であり、それなりによくできている。作文もしっかり読んでおり、学校等においてもしっかり指導いただいていると感じている。もう一つ。現在中断しているが、発達障害の子供を抱える親御さんの悩みに答える番組をやっていたが、これもディレクターの提案でやっていた。ディレクターの提案を通して可能性を広げて行きたい。
- 会長 幼い頃、赤胴鈴之助などの番組を家族で聴いていた。次はどうなるんだ

事務局

ろうか？という期待感を持ちながら聴いていた頃が懐かしく思える。いつの間にかラジオからその様なものが無くなったが、理由はあるのか？生ワイド番組が主体の編成になったことが大きいのではないかと。朗読は一人で話す分にはコストは少ないが、ラジオドラマとなり出演者が増えると制作費も大きくなる。だが、それ以上に次の日や来週のラジオ番組を楽しみに待つという余裕が人々の中からなくなってしまったのかもしれない。朗読に関しては、ぜひなんらかの形でやって行きたい。朗読サークルは多くあり、小学校などで活動されている。クオリティという面から行けばプロには敵わないかもしれないが、5分の毎日がいいのか、15分の週1回がいいのか、30分の月1回がいいのか、時間も朝がいいのか夜がいいのか、考えて生きたい。読んだ人が聞いてくれるというメリットもある。

会長

色々有るかもしれないが、ぜひ進めていただきたい。

委員

株主還元事業について。これは株主だけが対象なのか？

事務局

株主を対象に無料で実施する。当社のスポットCMは1回20秒の放送で定価3,000円である。

委員

これを他の企業に展開できないのか。1回3,000円であれば乗ってくることも多いのではないかと。

課長

実際の制作にはコメントの録音など何万円とかかる。それをこの企画に限って株主には無料で還元している。一般には何千円という価格設定がない。他には交通情報のキャンペーンを実施している。きまりものの中で企業名をPRしていくという商品も考える必要があるかもしれない。

委員

5,000円ぐらいであればたくさん集まるのではないかと。姫路城の修理に当たってそれに協賛するというのは姫路市民の意識の盛り上げに対しても効果的である。

局長

その話は目からうろこである。その様な発想はなかった。せいぜい株主にやっていたものを模様替えして取り組むというレベルで考えていた。株主以外の企業に1回3,000円や5,000円で売れるのであれば、よい。

会長

料金体系はきっちりしたものがあるのか。それを変更するのは難しいのか。

課長

すでに利用していただいているスポンサーが多くあるのでそれを変更するのは困難である。期間限定でキャンペーンを行なうぐらいが限界である。

事務局

収益構造のなかで、ケーブルテレビのように加入料などのベースがあれば広告費は柔軟に設定できるが、当社のように広告料100%で運営している場合は、仮に価格を10%下げれば、それが利益を直撃するので容易な値引きや価格体系の変更はできない。

会長

今、若い世代がラジオを聴かないということがある。その中で新しい取り組みとして、インターネットラジオを行なっているということだが、これは経費が発生するものか？またインターネット用の放送を準備する

ということは必要ないのか？もし、経費があまりかからないのであれば、本放送以外のインターネットラジオ用の番組を組むなどの可能性が将来あるのかもしれない。

事務局

4月～始めたインターネット放送はサイマルラジオというタイプであり、電波で流れているものがそのままインターネットでも聴けるというものである。それとはまた別に、「ポッドキャストイング」というものも実施している。これは、当社のホームページからいつでも見たり聴いたりできる。子供が出演する番組などは、なかなか1回の放送を聴けないという声があったので、行なっているが反響をもらっている。ただ1点問題があるとすれば、ポッドキャストイングはいわゆるジャスラックの管理楽曲をかけることができない。これを解決するために、サイマルラジオについては、権利料として各団体に多額の費用を支払っている。

会長

これから可能性のある取り組みではないか。電波だけでなくネットでも聴けるとなれば、これからはラジオなんだけど映像も見れるという風になれば、FMゲンキの可能性もより広がっていくのではないか？

事務局

ラジオもテレビもCATVもメディア・媒体であると考え、インプットとアウトプットがある。幸い当社には多くの方がゲストにお越しいただいたり、ニュースを放送したりという風に色々な入力になされているが、これまでは電波のアウトプットしかなかった。そこに、インターネットという出力手段を手に入れることになった。実験的に行なっているが、動画の配信も行なっている。スタッフが取材に行ったときに、どうせマイクを持っていくのならビデオカメラも持って行って画像を取って編集・アップすればとやっている。例えば姫路モノレールの公開などで撮影しインターネットにアップしているが、非常に多くのアクセスをもらっている。スポンサーには結びつかないが。しかし、これからはラジオ局という本業を土台にしながら、その資産と収益とブランドを生かして新しいFMゲンキの形をどんどん作っていけば、若い世代にも「FMゲンキはなんかやっているな」と思ってもらえるイメージを持ってもらえるし、それは何年かのあとには、よい形で返って来るはず。幸いにも当社はまだ余裕があるので、可能な範囲で今の中に色々なことにチャレンジして、次のステップで何ができるのか研究していきたい。現在、デジタルラジオの問題も出てきている。これが制度化されたら、文字データが画像データの手配も必要になってくると思われる。今のうちに、それらのノウハウも研究しておく必要があると思う。

会長

ぜひ頑張っていて取り組んで欲しい。

局長

現在JCBAには200数社加盟しているがサイマルラジオを行なっているのは30社ぐらいである。まだまだ始まったところなので、そのあたりも改良されてくるのではないか。現在は自社制作番組は聴けるが、J-WAVEなどは聴けない。スポンサーについては、サイマルラジオを使ってというのは制約がある。

事務局 ネットで流れるからプラスで余分にもらうということとはできない。ただ現在の定価を「サイマルもできるよ」といって売るのは問題がない。サイマルラジオ本来の意義として、市域が広がったコミュニティFMの難聴地域対策としてスタートしている。解決手段として中継局を建てるということもあるが、1局数千万円かかると聞いている。そして、幾つたてても聴取エリアは100%にならない。それを補完するためのインターネット放送である。だから、自社制作番組しか聴くことができない。J-WAVEや音楽放送は衛星放送などに加入すれば誰でも聴くことができる。しかし、FMゲンキの放送はFMゲンキからしか聴けない。

会長 情報を誰でも享受できる公正性という観点から展開されているということか。しかしいずれ新しい展開もあるのではないか？

事務局 それはもちろん出てくると思う。

委員 ラジオの周波数を若者が合わせられないということに衝撃を受けた。たしかにテレビはリモコンのボタンを押すだけである。私はFMゲンキというネーミングがとてもよいと思う。

課長 開局前に公募を行い、小学生女子の意見を採用したということだ。

委員 大学生のリポートの抜粋より、Kissは神戸にあるけどもそんなに密着していると思えないが、FMゲンキは密着していると感じたとあるが、私もそう感じる。

局長 どれだけのリスナーがいるのかというのは実体を掴みにくいと思うが、多くの方が聴いているという実感もある。最近聞いて感動したのは、目の不自由な方のためにボランティアグループの方が、当社のタイムテーブルを毎回点字にして配布しているということだった。

委員 視覚障害の方はFMゲンキのファンが多い。

会長 地域の情報を知るといことは生きていく上で必要なものである。しかし、その方の声はアンケートの声には出てこない。

委員 何気ないような話が好まれている。例えば季節感。今姫路のどこそでどんな花が咲き始めたなど、そのようななんでもない季節感が伝わってくるということが良い。自分はどんな地域に暮らしていて、どんな花が咲いていてということを感じることができるようだ。

局長 当社の番組で短いものだが「播磨音景色」というものがある。NHKは昔からやっていたが、例えば姫新線の踏切の音とか列車の音とか、そういうものを取り上げている。これも続けて行きたい。

会長 作るのが大変なのではないか？

事務局 マイクを持って踏切のそばで30分ぐらいいたりするので、かなりあやしいと思われているかもしれない。

委員 アンケートのデータで、聴いている人がまだまだ少ないと感じるようであれば、様々な取り組みで改善していただきたい。

会長 今回の電話アンケートは初めてか？であれば新たに始めようと思った理由は？

事務局

初めてである。これまではショッピングセンター等の街頭調査とフリーマガジンに添付したアンケートハガキだけであった。それぞれも1つの意見として尊重しているが、電話調査ではどうなるのか試してみようということになった。それぞれの調査の中でそれぞれの特徴があれば、総合する中でなにかの方策が生まれてくるのではないかと。電話調査はなんの予告もなしに電話を行なって聞き取るので、一番シビアに出るのではないかと考えている。秋にももう一度やってみるという話も出ているので、それを合わせてどのぐらいぶれるのかというのを検討し、同じ傾向であれば、例えば50代の女性のどうやって認知度を上げるかというようなことを考えて生きたい。

局長

討議は以上となるが、7月1日には岩成委員と柳谷委員にシンポジウムに参加していただく。よろしくお願ひしたい。

午後3時、以上の報告・討議・検討を終了し、閉会した。

公表年月日 平成22年7月4日

公表内容 審議の概要

公表方法 自社放送17時15分～17時45分「GENKI傑作選」内
事務所据え置き、ホームページ (<http://www.fmggenki.jp>)

以上